

行方もしらぬ

松隈義勇

二、三年前の文芸学会で、歌人清水房雄と渡辺先生と、詩の伊藤康圓先生、それに私に加わつての鼎談で文芸雑談をしたことがあつた。その時私は、

心なき身にもあはれは知られけり鴨たつ
沢の秋の夕暮

の歌について、下の句だけあれば、言いたいことは言いつくしてあり、それで十分である。上の句は要するに解説みたいなものであつて不要ではないかと述べた。しかし、後になつて考えてみると、上の句の「心なき身」は世を捨てて日常の喜怒哀楽の情を持たない身と

いうことで、そういう人の感ずる「あはれ」の美は既に限定され、予想されている。むしろ上の句が下の句を含んでいるようにさえ思われる。下の句は、ものさびた哀れな自然の情趣を情感的に表しているのであつて、「心なき身」に知られる「あはれ」の美そのものである。その美の把握が、やや理づめの上の句に支えられることによって、しっかりと立ってくる。この歌について、小林秀雄は、この歌のおのずから鼓動しているような心臓のありかは、上の句にあるという風にいっている。小林は上の句から読み、私は下の句から読んだというわけである。大体西行には論理的な理づめの所がある。世をすつる人はまことにすつるかはすてぬ人こそすつるなりけれ

身の上の避けられぬ必然となつてゐる。この無常の身をどのようにしたらよいものかと、いたたまれぬ思いでゐるのである。「地獄絵を見て」という題の歌に、見るも憂しいかにかすべき我が心かゝる報いの罪やありける
こんな物凄しい報いをうけるのかと心の苦しくなるようなひどい罪を、我れ自らの心の問題とうけとつて、わが心を責めくるしめてゐる。つまり、西行は無常なる我が身をどうするか、罪深き我が心をどうするかという、内面的な問題に自分の全存在をかけてぶつかつたのである。「世をすつる」の歌の「まことにすつる」とはそういう捨て方であつたのである。
西行は晩年に近く、
風になびく富士の煙の空にきえて行方も

知らぬ我が思ひかな

の絶唱を詠んでいる。理づめの所がなく、姿も調べも悠揚としてゐる。歌の上の句は空に見える無常の相である。「我が思ひ」は「我が身をさてもいづちかもせむ」・「いかにかすべき我が心」というような想いである。「思ひ」には「煙」の縁で「火」が掛けてあるから、熱い想いと考えてよい。そうした想いがつきとめられぬままに、空の彼方にゆくえも知らず消えて、虚しくなつてゆく。西行晩年の心の姿であろうか。

願はくは花の下にて春死なむそのきざら
ぎの望月のころ

は、辭世にあたる歌と考えられている。「我が身をさてもいづちかもせむ」・「いかにかすべき我が心」の想いが虚しく消えた後に、ただ静かに死ぬことだけを願っている。死ぬる以上は、一生を通じてあこがれた花と月に包まれて死ぬれば、それでよいと考えたのであろう。そしてこの望み通りに命終して、世人の感動を誘つたという。しかし、この歌そのものはちんまりと出来上りすぎている。我が身、我が心をいかにすべきかと、あれほど熱く物狂おしく悩み求め、そして花について

もろともにわれをも具して散りね花浮世
をいとふ心ある身ぞ

とまで思いをたかぶらせた、激しい魂が、最期に臨んでこのようにおさまりかえつたあり方で一生の決着をつけるということに、私は何かあき足りないものを感ずる。生涯の総決算をここに示そうという意図が動いたのではないかとこの疑いが念頭を去らない。川端康成が『末期の眼』でいっているような、西行の「末期の眼」に映つたものが何であつたかをこそ知りたいと私は思う。

それについて想い出されることがある。芭蕉の最後の句、

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

は、わび・さびの漂泊詩人芭蕉のイメーシそのものを総括して表示したような内容の句である。こういう点から多くの評家の絶讃を得ているのであるが、詩というものは言葉の意味が指し示す内容だけのものではなく、言葉そのものの姿や調べという、心情に密着したものによつて成り立つものである。「旅に病で」の句は姿や調べからいうと、切れ字がなく、上から下へと暗い気分と力が限りもな

は、内容が指し示す、わび・さびの漂泊詩人のイメーシとはおよそ一致しないものである。芭蕉は生涯の総決算として自分のイメーシを墓碑銘的に示し残そうとしながら、ふと自分の本音を調べに漏らしてしまつたのであ

らう。彼はこの句を門弟に示した時に、臨終を間近にして「妄執」を捨てたいが離れられぬと悔やんだという。この句、つまりは妄執の表白である。小林秀雄は西行論の中で、「彼の風雅は芭蕉の風雅と同じく、決して清淡という様なものではなく、根は頑丈で執拗なものであつた。」といつてゐるが、西行にしても、芭蕉にしても、その通りと思う。西行の「風になびく」の歌にあたる芭蕉の句を挙げよというならば、

この秋は何で年よる雲に鳥

であらう。漂泊者の心に忍びよる老愁を詠む。雲の果てにうすれゆく鳥影が表すのは、命か。人生の証としての希望や夢、生命感の消失する虚しさともいふべきか。芭蕉は、旅ともいわず、孤独ともいわず、また自然の寂しさもいわず、しかもそれらすべてを象徴的に示している。芭蕉が「末期の眼」に見たものはこれであつたのだらうか。